

インド 1年8か月ぶりに利下げ

インド利下げ決定

1月15日、インド準備銀行(中央銀行)は緊急会合を開催し、政策金利(レポ金利)を現行の8.00%から0.25%引き下げて7.75%にすることを決定し、即日実施しました。利下げは2013年5月以来1年8か月ぶりとなります。

準備銀行のラジャン総裁は2013年9月に総裁に就任して以来、インフレ抑制を目的に計3回の連続利上げを実施しました。消費者物価指数の上昇率(対前年)が就任直後の11.16%(2013年11月)から2014年12月には5.0%に低下する等、その効果や原油安等によってインフレ懸念が後退したことから、景気下支えのための金融緩和へと政策を転換しました。

2014年12月の会合で利下げの可能性が示唆されていましたが、タイミングについては2月初旬の定例会合後になるとの見方も多く、予想外のタイミングでの利下げ決定となったようです。

準備銀行は、インフレ率の低下が続けば追加利下げの可能性もあるとしています。

市場の反応

予想外のタイミングでの利下げ、追加利下げの可能性示唆等を受け、1月15日の株式市場(SENSEX指数)(現地通貨ベース)は前日比約2.7%上昇の28,075.55ポイントと、約1か月ぶりに28,000ポイント台を回復しました。10年国債金利は低下して7.7%割れ、インドルピーは対米ドルでインドルピー高、対円でインドルピー安となっています。

今後の相場見通し

【株式市場】

以下の理由から、インド株式市場は調整局面を脱し、再び上昇基調に回帰するものと見ています。

1. 消費者信頼感指数の上昇(※)等から判断してモディノミクス効果が徐々に浸透しつつあると判断され、今回の利下げ効果も加わって経済成長の勢いに弾みがつく可能性があること。
2. 追加利下げの可能性を示唆したことが投資家心理に好影響を与えられられること。
3. インドは原油需要の約8割を海外から調達する原油輸入国であり、最近の原油価格の下落はインド経済にプラスの効果をもたらすと思われること。

(※)ラジャン総裁就任直後の39.0(2013年10月)から、2014年12月には47.4に上昇。

【債券市場】

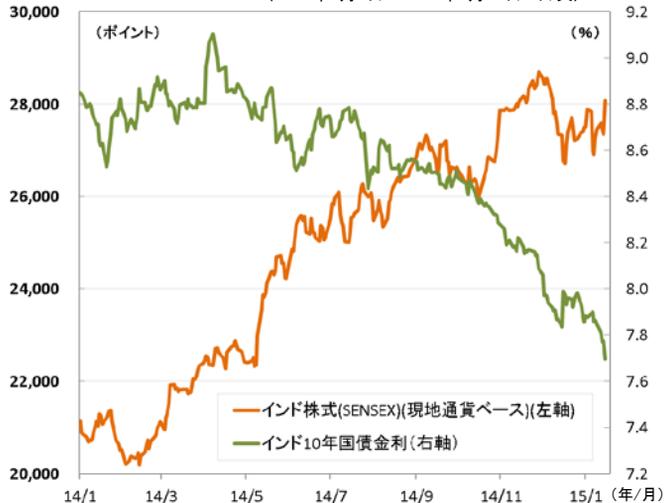
リスク回避、質への逃避による資金の流れが足元の金利低下をもたらしている可能性もあります。株式市場の復調等により、一時的に金利が上昇する局面も考えられますが、追加利下げ期待や原油価格下落による物価抑制効果等を背景に再び低下トレンド、ないしは低位安定した状態に戻るものと思われれます。

【為替市場】

日本や米国などとの金利差縮小観測等から一時的に弱含む場面も想定されますが、インド経済への信認の高まり等を背景に、再びインドルピー高の展開になるものと見ています。

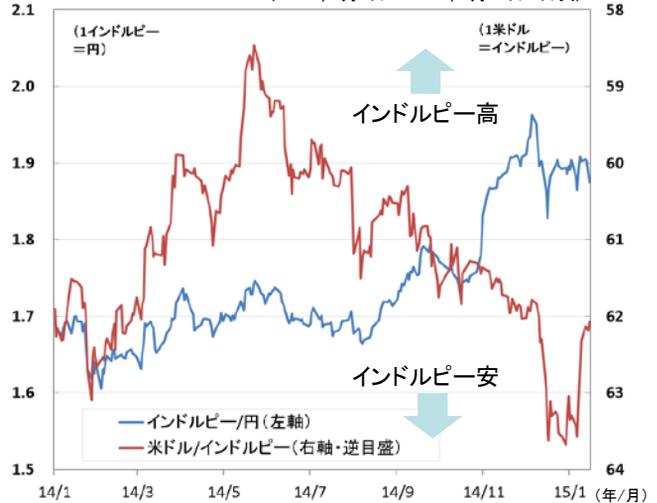
【図表1】インド株式とインド10年国債金利の推移

(2014年1月1日～2015年1月15日 日次)



【図表2】インドルピー(対米ドル・対円)の推移

(2014年1月1日～2015年1月15日 日次)



(出所)図表1、2はブルームバーグデータを基にニッセイアセットマネジメントが作成